

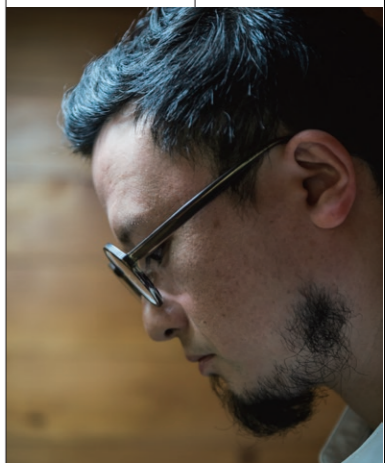
雲仙焼窯元



雲仙の山々は本当に美しい。
美は自然の中であり、私は常にそこに身を置いています。
そうして自分が感じたものを抽出し、作陶に活かす。
雲仙という土地は、
陶芸家にとつて、とても良い土地だと思います。

Hiroki Ishikawa

石川裕基さん



雲 仙焼窯元の展示室は茶室も兼ねており、四代目・石川裕基さんは抹茶を点てながら、焼き物の魅力について語ってくれた。「陶芸には、自然から形を創造できる楽しさがあります。ろくろを回すうちに、土の塊が茶碗や花器になってゆく。それ自体が楽しいですね」。

展示室には石川さんをはじめ、父・照さんや母・ハミさんの作品も並んでおり、それぞれに豊かな表情をたたえている。作風は自由でのびやか。石川さんは「先々代の祖父は、自分の真似はしないでいい、受け継いで欲しいのは焼き物への情熱だと言っていました」

と微笑む。

しかし、好きなものをただ自由で作っているわけではない。石川さんはさらりとこう言う。「両親からは、例えば一つの抹茶碗を作ろうと思えば、まず同じ形のを百個作りなさい、と言われています。百個作って、ようやく手がその形に慣れたところで初めて自由に作ってみるんです」。つまり作陶の本当のスタートは、百一個目からというわけだ。

雲仙焼の真骨頂といえ、照さんが手掛けた羅変天目。虹色の輝きは宇宙を感じさせ、見ているだけで吸い込まれそう。「羅変天目の釉には、雲仙普賢

岳の噴火時に噴出した火山灰を百パーセント用いています。まさにこれこそが雲仙焼を代表するもの。私も近い将来、父に教わり、この焼き物に挑戦したいと思います。いつか父を超えるようなものを作ってみたいですね」と石川さん。

雲仙は県内屈指の温泉地。工房の目の前にも共同浴場があり、日に二、三度は湯に浸かるといふ。二十六歳まで東京で忙しい毎日を送っていたという石川さんは「温泉に入り、時々お茶を点でて、作陶する。こんなスローライフができるなんて、ご先祖様に感謝しありませんね」と笑った。



お茶を点てる時間は、作陶に良い影響を与えるという。



その手で
雲仙の息吹を
吹き込み、形を作る。



羅変天目の茶碗。
そこには、雲仙だからこそ生まれた美がある。